

井伏鱒二全集

第十三卷

井伏鱒二全集

第十三卷

筑摩書房

井伏鱒二全集第十三卷

昭和五十年四月二十日初版發行

著 者 井 伏 鱒 二

發行者 井 上 達 三

發行所

筑 摩 書 房

東京都千代田區神田小川町二ノ八

電話 東京(291)七六五一(代表)
振替 東京六十四一 二三

印刷 株式會社精興社
製本 牧製本印刷株式會社

目 次

黒い雨	三
誕生日	二九
茅ノ島所見	三五
御金藏破り	三三
肇さんのこと	三九
半生記	三四

解

題

.....

四五

井伏鱒二全集

第十三卷

黒い雨

1

この數年來、小畠村こなけの閑間重松しずまつは姪の矢須子やすこのことで心に負擔を感じて來た。數年來でなくて、今後とも云ひ知れぬ負擔を感じなければならぬやうな氣持であつた。二重にも三重にも負目を引受けてゐるやうなものである。理由は、矢須子の縁が遠いといふ簡單なやうな事情だが、戰爭末期、矢須子は女子徵用で廣島市の第二中學校奉仕隊の炊事部に勤務してゐたといふ噂を立てられて、廣島から四十何里東方の小畠村の人たちは、矢須子が原爆病患者だと云つてゐる。患者であることを重松夫妻が祕し隠してゐると云つてゐる。だから縁遠い。近所へ縁談の聞き合せに來る人も、この噂を聞いては一も二もなく逃げ腰になつて話を切り

あげてしまふ。

廣島の第二中學校奉仕隊は、あの八月六日の朝、天満橋かどこか廣島市西部の或る橋の上で訓辭を受けてゐるとき被爆した。その瞬間、生徒たちは全身に火傷をしたが、引率教官は生徒一同に「海ゆかば……」の歌をピアノシモで合唱させ、歌ひ終つたところで「解散」を命じ、教官は率先して折から満潮の川に身を投げた。生徒一同もそれを見習つた。たつた一人、辛くも逃げ歸つた生徒からその事實が傳はつた。やがてその生徒も亡くなつたと云ふ。

これは小畠村出身の報國挺身隊員が廣島から逃げ歸つて傳へた話だと思はれる。けれども矢須子が廣島の第二中學校の奉仕隊の炊事部に勤務してゐたといふのは事實無根である。よしんば炊事部に勤めてゐたとしても、「海ゆかば……」を歌つた現場に炊事部の女子が出かけてゐる筈はない。矢須子は廣島市外古市町ふるいちの日本纖維株式會社古市工場に勤務して、富士田工場長の傳達係と受付係に任ぜられてゐた。日本纖維株式會社と第二中學とは何のつながりもないのである。

矢須子は古市工場に入社して以來、廣島市千田町二丁目八六二の重松夫妻の寓居に同宿し、重松と同じく可部行の電車で同じ工場へ通つてゐた。絶対に第二中學校にも奉仕隊にも關係がない。ただ第二中學の卒業生の一人で北支に出征してゐた軍人が、慰問袋のことで矢須子に鄭重すぎる禮狀をよこし、それから暫くたつて和歌を五首か六首か書いてよこしたことがある。それを矢須子が重松の家に見せたので、「矢須子さん、これは相聞歌といふのでせう」と家内が、年甲斐もなく顔を赤らめたのを重松は覺えてゐる。

戰爭中には軍の言論統制令で流言蜚語が禁じられ、同覽板組織その他で人の話の種も統制されてゐる觀があつた。それが戦後になると、追剥の噂、強盜の噂、賭博の話、軍の貯藏物資の話、一夜成金の話、進駐軍

の噂、その他いろんな噂が氾濫し、そのうち月日が経つにつれて噂も話も忘れられて行つた。矢須子に關する噂もその命脈通りに行けばいいのだが、さうは行かないで、矢須子の縁談で聞き合せて來る人があるたびに、廣島第二中學奉仕隊の炊事部にゐたといふ噂が蒸し返される。

初めのうち重松は、いつたい誰がそんな流言を放つたのだらうと、その元兇を探り出してやらうと思つてゐた。しかし小畠村の人で原爆の落ちるとき廣島にゐた者は、重松と家内と矢須子の他には、報國挺身隊に所屬する青年と奉仕隊員だけであつた。報國挺身隊員といふのは、廣島市街の防火準備で家屋強制疎開の勞役を勤めるため、縣内の各郡から徵用した青年で組織され、小畠村の青年は神石郡と甲奴郡の混成部隊である甲神部隊と名づける隊に編入されてゐた。この人たちは民家を倒壊させるのが任務であつた。家の柱といふ柱に鋸を入れ、八割がた挽切つて棟木に太綱をつけ、二十人三十人の者が引張つて倒すのである。平屋はちよつと倒れにくい。がさがさといった調子に倒れて來る。二階屋は割合に手易くどつと一度に倒れるが、土煙があがつて五分間も六分間もそれ以上も寄りつけない。ところが、甲神部隊のものも奉仕隊員も廣島に到着して二日目に、漸く仕事に取りかかつた矢先のところで被爆した。即死したもの他は、みんな焼けただれた身を廣島周邊の三次、庄原、東城などに收容されたので、小畠村では消防團員が木炭バスで廣島の焼跡へ出勤し、つづいて終戦の日の早朝、勤勞奉仕の青年團員が、三次や東城の假收容所へ怪我人を探しに行つた。勤勞奉仕の青年團員は、出發に際して青年團長代理立會ひのもとに町長から壯行の辭を受けた。

「みなさん、戰時御多用の折から御苦勞さまであります。今さら申すまでもなく、みなさんの連れて歸られる怪我人は全身が火ぶくれになつてゐるといふことでありますから、怪我人に對しまして、より以上の苦痛

を與へさせないやう御注意のほどをお願いする次第であります。敵は謂はゆる新兵器を使ひまして廣島市の上空を襲ひ、幾十萬にも及ぶ廣島在住の無辜の民を一瞬にして阿鼻叫喚の地獄に晒したといふことであります。廣島から逃げ歸つた挺身隊員の話では、新兵器で廣島の町が潰れたとき、『助けてくれえ、助けてくれえ』と泣き叫ぶ聲が、その幾十萬人もの聲が、さながら地の底から湧き起つて來るやうであつたと申されました。廣島から歸りに見た福山の町も焼野原になつて、お城の天守閣も涼櫓すゐどろも焼け失せてをつたといふことであります。戦争とはこのやうなものかと胸を締めつけられる思ひであつたと申されました。しかし、いづれにしても戦争が行はれてをることは、まぎれもない事實でありまして、みなさんは勤勞奉仕團員として戰友を迎へに赴かれるのでありますから、撃ちてしまふのしるしとしてお持ちになつてをる竹槍だけは、決して落さないやうに御注意のほどをお願いするのであります。今、みなさんを見送るに際しまして、朝まだきの暗がりに、明りもつけず壯行の辭を述べるのは甚だ残念であります、時局がら御了解をお願いする次第であります。」

村長はこの演説を終ると、見送りに來てゐた八十人あまりの人に「それでは、勤勞奉仕團員の壯途を送るため、萬歳三唱をお願いします」と音頭をとる兩手をあげた。

勤勞奉仕團員は、三次町に行くものと庄原町に行くものと、東城町に行くものと三隊に分れて出發した。みんな荷馬車のあとから黙々として歩いて行つた。東城に向つた一隊は、小畠村と東城の中ほどにある油木町で、道ばたの農家の縁側に腰をかけて晝の辨當を食べた。そのとき家のなかからラヂオの重大放送が聞えて來た。みんな暫く黙りこんでしまつたが、

「今朝の村長の壯行の辭は、ちよつと長すぎたなあ。」

と馬の手綱取りをする男が云つた。この言葉をきつかけに、みんな竹槍をどうするかについて相談し、縁側を貸してくれた農家へ置土産として來ることに一決した。

東城町の收容所は間に合はせの古い建物で二人の監視人がゐたが、どうしていいか誰も手のつけやうがなかつた。被爆者たちは疊の上にごろごろ轉がつて、みんな顔が焼け爛れてゐるから誰彼の區別もつかないのだ。なかには頭の髪のあるべき部分がつるつるに禿げ、ねぢり鉢巻をしてゐたと見える跡だけ皮膚が正常に残つて、兩の頬が老婆の乳房のやうに垂れさがつてゐるものもある。しかし怪我人たちは耳だけはみんな聞えるので、一人一人から名前を聞きながら、丸裸のものには皮膚に墨汁で名前を書き、布ぎれを少しでも着けてゐるものにはそれに名前を書いた。怪我人たちが苦しがつて呻いたり動いたりして位置を變へるので、お粗末だがさうでもしなくては人別して行くことが出来なかつた。

「醫者は何をしてをるんだらう。醫者は治療しないのか。」

奉仕團員の一人が監視人にさう云つたが、醫者も治療法のわからない病人だから減多なことは出来ないといふ手を控へてゐた。怪我人の火傷の苦しみ以外の苦痛も何に原因してゐるか知れないので、ともかくバンドボンといふ藥を注射して六人だけの苦痛を一時的に和らげた。醫者はその藥をもうそれきりしか持つてゐなかつたさうだ。

これは後日、重松が廣島を引揚げて來てから勤務奉仕團員の一人が聞かしてくれた話だが、もうそのころには重松自身に原爆症状が現れてゐた。少し野良仕事に精を出すと體がだるくなつて頭に小さなぶつぶつが

出來て来る。髪の毛を引張ると少しの痛みもなく抜けて来る。こんな場合、重松は休養して充分に栄養を攝る。一般の被爆者の症状は、何といふこともなく體がだるく重くなつて、數日にして頭の毛が痛みもなくすつかり脱落し、齒もぐらぐら動きだして抜けてしまふ。體がぐつたりとなつて死んでしまふ。もし發病初期に體のだるさを感じたら、何よりも先づ休養して栄養を攝ることが肝腎である。無理を押して仕事をするものは、下手な植木屋が移植した松の木のやうに、次第に氣力を失つて生命を斷つて行く。小畠村の隣村でもその隣の村でも、被爆を免れたつもりで廣島から至極元氣で歸郷して、一箇月か二箇月ぐらゐ根をつめて働いてゐたものは、一週間か十日ぐらゐ床について死んでしまつた。發病が體の一局部に現れると、この病氣特有の痛みを感じ、肩や腰の痛みも他の病氣とは比較しがたい症状である。

重松は巡回診斷の醫師からもちきり原爆病だと診斷された。福山の藤田醫師からも同様の診斷を云ひ渡された。しかし矢須子は決して病氣ではない。然るべき醫師の健康診斷を受け、また保健所でも被爆者定期健康診斷を受け、血球數、蛔蟲、尿、血沈、打診、聽診、その他、ことごとく異常なしと診斷された。これは終戦後四年十箇月目のことで、矢須子にとつては勿體ないほど喜ばしい縁談ばなしが持ちあがつてゐるときであつた。先方は山野村の或る舊家の若主人である。矢須子をどこで見かけたものか、仲人を介して話を持ちかけて來た。矢須子に聞いてみると異存はないと云ふ。重松は今度こそ原爆病の噂で話がお流れにならないやうに警戒して、然るべき醫師に矢須子の健康診斷證明書を書いてもらつて仲人に郵送した。

「今度は大丈夫だ。念には念を入れろだ。このごろの人は、結婚する前に健康診斷書を取交す傾向だからな。先方でも、妙なことだとは思はんだらう。あの仲人は元軍人の奥さんだと云ふことだし、都會的な新式の風

習も知つてをるだらう。今度こそ大丈夫だ。」

重松は家内にさう云つて半ば自負してゐたが、この念入りなやりかたは氣がきいてゐて間が抜けるといつたやうな結果を招いた。仲人は矢須子の健康について、小畠村のどこかの家へ聞き合はせに來たと見え、原爆投下の日から小畠村に歸るまでの廣島に於ける矢須子の足どりを知りたいと手紙で云つて來た。但、これは仲人としての自分ひとりの希望であつて、求婚する本人に連絡した上のことではないと云つてあつた。

重松は重ねてまた自分が負目を感じるになつたと氣がついた。家内はその手紙を讀むと黙つて矢須子に渡し、疊に目を落してゐたが立つて納戸に引込んでしまつた。矢須子も納戸に入つて行つた。暫くして重松が覗いて見ると、家内が矢須子の肩に肩を凭せかけて二人しくしく泣いてゐた。

「よろしい、今度といふ今度は、わしが悪かつた。しかし、人の噂だけで業病扱ひするとは何ごとか。いや、我々は再起をはかるんだ、突破口を見つけるんだ。」

さうは云つたものの氣休めにすぎなかつた。

矢須子はそろそろと立つて、簞笥の抽斗から取出した常用日誌を無言のまま重松に手渡した。昭和二十年度の矢須子の日記である。表紙に日章旗と海軍旗を交叉させた模様がついてゐる。廣島の千田町にゐたところには、夕食後に矢須子が卓袱臺ちやぶだいを机にしてこれに日記をつけてゐた。どんなに疲れた日でも必ずつけてゐた。

矢須子の日記のつけかたは、四日間か五日間ぐらゐる簡単に五行か六行で片づけて、五日目か六日目ぐらゐるところで、数日間の出來事をまとめて詳しく書き記すやりかたである。これは重松自身がずっと以前から實行してゐた方式で、重松が教へてやつたから矢須子が踏襲したものである。歸りが遅くて眠くてならない

晩は、簡単に片づけることにして置くところからこの着想を得た。重松自稱の「緩急式」といふ日記形式である。いづれにしても重松は、矢須子のこの日記を筆耕して仲人に送る必要があつた。

昭和二十年八月五日以降、数日間の日記文を重松はそのまま書き寫した。

八月五日――

富士田工場長に明日の缺勤届を提出し、家に歸つて荷物疎開の支度をする。内容は、をばさんの夏冬の紋附、帯三本、冬着三枚（このうち、ひい婆さんの嫁入りのときに着て來たといふ黄八丈、これは大事な品）夏着四枚、をぢさんの冬のモーニング、夏冬の紋附と紋附羽織、冬の洋服二着、ワイシャツ一枚、ネクタイ一本、卒業證書、私の夏冬の式服、帯二本、卒業證書。以上を菰で梱包し、私の肩にかけて行く鞆に米三合、常用日誌、萬年筆、印鑑、赤チンキ、三角巾を入れる。（疎開荷物は、終戦後二年目に小島村へ梱包のまま返送してもらつた。――重松後日記）

夜半、空襲警報が発令され、B 29の編隊が上空を素通りした。三時ごろ警報解除。をぢさんが夜警から歸つて來て、先日B 29が小島村附近に「府中町を空襲することも忘れてゐるのではありません。いづれそのうちに空襲しますから」と、ふところ手をして云ふやうな、しかし文章に異様な凄みをきかせた傳單を落して行つたさうだと仰有つた。やはり府中町も空襲されるだらうか。先日、山梨縣から來た人の話では、甲府が空襲される前に、B 29が立派なアート紙のパンフレットのやうな傳單を落して行つた。米軍の占領したサイパン島かどこかの島で、日本人が食糧を充分に貰つて楽しく暮してゐるといふ記事が書いてあつ

たさうだ。アート紙なんて広島では見ることも出来なくなつてゐる。

三時半、就床。

八月六日――

朝五時半、能島さんのトラックが来て、疎開荷物を運ぶ。古江町で閃光と轟音。広島市街に噴火のやうな黒煙。歸りは宮津町に出て船で御幸橋下へ着岸。をばさんは無事、をぢさんは顔に怪我。世紀的な大椿事である。しかし全貌はよくわからない。家が十五度ぐらゐ傾いてゐるので防空壕の入口でこの日記を書く。

八月七日――

昨日、宇品工場の工員合宿所へ移ることに決定したが實行不可能のため中止、をぢさんの言葉に従つて古市へ避難。をばさんも御一緒。工場の事務所で、をぢさんは落涙數行。広島は焼けこげの街、灰の街、死の街、滅亡の街。累々たる死骸は、無言の非戦論。

今日は工場の損害調査。

八月八日――

朝飯の炊出しに忙殺。

工場運営に關する協議決定事項の要が發表された。